

神輿參集するもの十社頗る殷賑なり。

(ハ) 神 寶

神寶として珍蔵するもの二器あり。曰く木椀、曰く燧篋なり。往古より祭典を行ふ時神輿を調進し、及び點火の時必ず此の二器を用ふ。二器共に木質古拙殆んど辨識し難し。是實に二千年以前の物なりといふ。

二、縣 社

洲宮神社

洲宮神社は神戸村洲宮の略ぼ中央にあり、境内二百七十二坪、宮山の麓老杉森々として神殿を極むる中に鎮坐す。

神殿は間口壹間半奥行亦同じ、中殿は間口貳間奥行二間半、拜殿は間口四間奥行三間、境内に左の三社あり。

イ、子安神社

祭神 豊玉比咩命
由緒 元正天皇養老二年夏五月郡紀伴人草創

ロ、神明社

祭神 天照大神
由緒 不詳
建物 堅竪尺横五寸石宮

ハ、日枝神社

祭神 大山咋命
由緒 不詳
建物 竪一尺横五寸石宮

社傳に曰く、神武天皇元年辛酉四月中卯の日、天富命社殿を魚尾山の上に建立し、后神天比理乃咩命を祭る。山は村南の海濱に在り。故に洲神又は洲宮と稱し、其の鎮座の所を洲宮村と云ふ。文永十年癸酉十月十五日夜火災に遭ひ神殿焼失す。建治三年丁丑三月社地を今の所に移し、社殿を再建す。洲宮、藤原の二村の氏神にて、例祭を毎年八月十一日とす。東鑑に須宮或は洲崎社に作る。之を按ずるに本祠に二殿あり。拜殿を一の宮と云ひ、洲崎村の御手洗山に在り。奥殿を二の宮と云ひ、洲宮村の魚尾山に在り、二殿にして一社號なりしを、後今の如く改めたるなり。明治十八年四月十七日俱に縣社に列せらる。

洲崎神社

西岬村洲崎の西端に御手洗山あり、前面は茫洋たる太平洋に面し、脚下は危礁峭々、怒濤之に激して飛雪紛々、前方東京灣口の海波を隔て、雲烟糝糊の間に豆相の連峯及び富岳の雄姿を望み、左は狂瀾怒濤名にし負ふ鬼が浦を隔て、近く遠く布良崎及び伊豆七島を望むべく、右は碧波浩蕩油を流せるが如き鏡浦を隔て、大房岬と相對し、那古・船形の連峰起伏せる民家肆店の交錯せる一々指し數ふべし。斯かる風光明媚なる御手洗山の中腹、老樹蒼鬱たる奥に、千古の森殿を湛へて洲崎神社鎮り